

# 写真で見る糸満

山本 佑香

## 1. はじめに

三日間のフィールドワークで知ることができた糸満について、写真を中心としてまとめていく。

## 2. 糸満とは

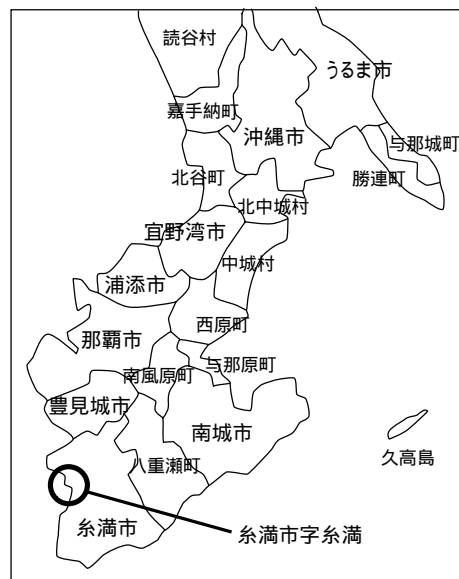
### 2.1 糸満の位置

糸満市は沖縄本島の最南端に位置し、那覇からは約 12km の距離である。本稿で「糸満」というのは、現在の糸満市字糸満にあたる地域を指す( 地図 1 )。

この地域はかつて糸満村だったが、1908 年に糸満町となった。当時の沖縄県では県都の那覇と首里、そして糸満町以外は全て村であった。

1961 年には周辺の三つの村との合併で糸満町が現在の糸満市全域に拡大し、それに伴って同地域が糸満町字糸満となり、1971 年からは糸満市字糸満となっている。

写真 1 は 1940 年に撮影されたもので、山巔毛(さんていんもう)というところから下に見える道路と周辺の家並みの様子である。そして写真 2 が現在の家並みを同じく山巔毛から撮影したものである。



地図1 糸満市字糸満の位置



写真1 合併前の糸満町  
(山巔毛展示写真より:1940年1月3日 坂本万七氏撮影 / 2001年3月 糸満市教育委員会)



写真2 現在の家並み

## 2.2 海人のまち

沖縄は海に囲まれていることから、漁業が盛んであるというイメージがあるが、実際は漁業の割合は少ないものだった。ほとんど漁業だけで生計をたてていた地域というのは糸満だけであり、なぜ沖縄全体で漁業がそれほど目立たないのだろうか、という疑問が浮かんでくる。

そこで考えられるのは、「勸農政策」というものである。勸農政策というのは、農業を積極的に奨励する政策であり、沖縄では1654年に農村居住者の都市移住を禁止した。首里王府時代の琉球の産業は農業が中心であり、漁業については積極的ではなかった。

海辺の百姓が終日海に出て漁をするということは家業をおろそかにすることであるとされ、農業を仕事、漁労を遊び、とみなしていた。そのため当時の沖縄では、農業を主とする海村が大多数であり、実際は半農半漁の生活をしていたが、その漁というのは商売目的ではなかった。

この勸農政策によって人為的に海から遠ざけられ、沖縄では農業が積極的に勧められてきたが、その中でも糸満は例外的に漁業が盛んに行われていた。珍しく専業漁業者が存在する地域であり、現在も海人のまちとして知られている。海人（うみんちゅー）というのは沖縄の方言で「漁師」を意味する。かつて、「アギヤー」と呼ばれる集団追い込み漁を考案し、日本各地だけでなく東南アジアまで活動を広めたことで有名である。

写真3は現在の糸満漁港で、写真4、5は昔の様子である。写真4に見えるような「サバニ」というクリ舟で漁に出ていた。また、写真5のように、男たちが獲ってきた魚を女が買い取って頭上運搬で売り歩くスタイルであった。

この女性の頭上運搬での魚売りを「かみあきねー」といい、氷のない時代に魚が悪くならないうちに那覇まで歩いて売りに行っていた（写真6）。沖縄ではお母さんのことを「あんまー」といい、糸満のあんまーは魚を競い合って売っていたことや、長い距離を歩いて商売していたことなどから、たくましい女性と表現されることが多い。

そのあんまーたちが商売をして貯めたへそくりを「わたくさー」という。市場の方の話によるとわたくさーは、あまり魚が獲れないときや、漁に出た夫にもしものことがあった時に、子どもたちと生活していくことができるように貯めているお金で、普通のへそくりとは違うので誤解はしないで欲しいと言っていた。

また、「糸満売り」という言葉があり、これは雇い子（やといんぐわ）と呼ばれた10歳前後の子どもが、糸満の漁師のもとに働きに来ていた制度のことである。雇い主の下で住みこみで働き、糸満の漁業の技術を叩き込まれた。男は漁を手伝い、女は炊事を主に仕事とした。年季を終えた少年たちは自分の土地に戻り、身につけた技術によって仕事をした。

この、雇い子の話は人身売買として取り上げられることがあるが、糸満の人にとっては自分たちの漁業の技術を教え、期間を終えた子どもはその技術で生活していったので、決して人身売買ではなく、悪く捉えられて誤解されているのが困ると話していた。



写真3 現在の糸満漁港



写真4 昔の糸満漁港  
(上原佑強氏提供写真より)



写真5 昔の漁師の様子  
(海人工房展示写真より)



写真6 かみあきねー  
(中央公設市場所蔵写真より)

現在は17歳から80歳までの年齢層で、漁師一人ひとりが違う漁をしていて、漁に出る時間、期間などバラバラである。

漁から帰ってきた後には、休憩所で作業をしたり漁師同士で酒を飲みながら話をしたりしているようだ(写真7の丸の周辺)。

糸満には漁業に関する資料館にあたるものがなく、上原謙さんが個人的に海人工房という展示を行っ

ている(写真8・9・10)。漁具の収集に説明が添えられているものや、写真もあった。実際に漁に使っていたものだけでなく、上原さんが再現して作ったものもいくつかあった。

また、糸満には「みーかがん」という水中眼鏡(写真11)を発明した人物がいて、その方の話も紹介されている。現在では当たり前のように使われている水中眼鏡が、この糸満から世界中に広まったという話は、おそらく知らない人が多いと思う。



写真7 糸満漁港



写真8 海人工房の漁具



写真9 海人工房の漁具



写真10 上原謙さん



写真11 みーかがん

### 2.3 糸満の行事

糸満を代表する行事は二つあり、糸満ハーレーと糸満大綱引きである。糸満ハーレーは旧暦の5月4日に行われ、糸満大綱引きは旧暦の8月15日に行われる。

糸満ハーレーはサバニと呼ばれる沖縄のクリ舟で行う競漕であり、沖縄で行われている中で最大である。中国語ではハーリーといい、沖縄全体でもハーリーと呼ばれることが多いが、糸満ではハーレーという。

詳しい内容だが、まず御願をしてから午前10時にハーレーが開始される。スタートは山巔毛(さんていんもう)というところで振られる旗が合図となっている。競漕のコースは糸満漁港内の850mであり、様々な種類の競技がある。メインは御願ハーレーといい、西村、中村、新村の三つの集落で競う。この集落は昔の糸満の三つの村であり、勝った村にはその年の豊漁が約束されると伝えられ



写真12 糸満ハーレー  
(糸満ハーレーのホームページより)



ている。そして勝ったチームはノ口たちが待つ白銀堂というところに報告される。

沖縄では最近、観光化して日曜や祝祭日に行くところが増えてきているが、糸満ではあくまで神事性を重んじて旧暦に従って行われている。

糸満大綱引きは豊作と大漁を願って行われる。フィールドワーク中にも夕方になると旗頭の練習をしている姿が見られた。

ちなみにエイサーは糸満では行われていないが、糸満市では五つの地域で行われている。

山巔毛（さんていんもう）は糸満を見渡せるような高い丘の上に位置し、展望台も設置されている。写真 13 のようなところが各方位にあり、そこで御願をする（写真 14 の丸で示した場所）。



写真 13 山巔毛



写真 14 展望台から見た山巔毛

### 3 . 白銀堂

白銀堂というのは豊漁と航海の安全を守る神様が祭られているお堂で、別名をイービンメーという。私が行った時は清掃をしている方だけしかいなかったが、旧正月には多くの参拝客で賑わうそうだ。また、ハーレーの時には競漕が始まる前にここで儀式をすることになっている。



写真 15 白銀堂



写真 16 堂内の拝所

白銀堂にはいたるところに写真 16 のような拝所があり、そのひとつひとつを決められた順番で回って拝むそうだ。写真 17 は写真 15 の梁のところに貼り付けられている寄付の記録である。

また、白銀堂には伝説として語り継がれている話<sup>1)</sup>があり、「意地ぬ出らあ手引き、手ぬ出らあ意地ひき」という言葉が沖縄の格言とされている。これは「意地が出たら手を引っ込めろ、手が出たら意地を引っ込めろ」という意味である（写真 18）。



写真 17 寄付の記録



写真 18 白銀堂の伝説にまつわる言葉

#### 4. 共同組織

##### 4.1 門

糸満には門（じょー）と呼ばれる小路（すーじぐわー）がある。これは、海に向かって真っ直ぐに伸びていて、9本の小路を中心にそれぞれの地域が形づくられている。かつては入江があり、その名残であると言われている。

門はそれぞれ、イービンメー門、富盛（とうむいん）門、長嶺（ながんにん）門、根前小（たんめーぐわーん）門、高良小（たからぐわーん）門、町（まーちん）門、兼久小（かにくぐわーん）門、西新地（にしみーじん）門、鍛冶屋（かんじゃー）門、と名づけられている。白銀堂を表す「イービンメー門」と、昔そこにマチ（市場）があったことから名づけられた「町門」以外は全て、その場所に住んでいた一族の屋号から名づけられている。

この門は入江ごとに血縁集団が集まり、共同体として舟上げや浜掃除などを共同で助けあって行っていた。この独自の集落の形成が結びつきの強さを生み出し、今でも地域共同体の暮らしの姿が伝わっている。糸満ハーレーも門ごとに競われている。



写真 19 門

#### 4.2 門中

門中というのは血縁集団のことであり、糸満には約 40 の門中がある。門中での行動は旧暦と重なり、旧暦の 2 月、6 月、12 月の吉日に地域住民の健康と繁栄を願って門御願（じょーうがん）が行われている。

写真 20 の幸地腹・赤比儀腹門中墓は、沖縄で最大の門中墓であり、5,400 平方メートルの敷地に五つの墓がある。門中と同じように「腹」も血縁集団を表す言葉であり、一族が祭られている。この墓の手前に広いスペースがあり、そこにビニールシートを敷いて一族で集まる。また、脇には形の違う墓（写真 21）があり、それは糸満から離れた地で亡くなった者などを一定の期間はこの共同墓に入れずに分けるためだそうだ。



写真 20 幸地腹門中墓



写真 21 墓

写真 22 は門中の墓の使用上の注意が書かれた板である。これはいくつかの墓の敷地内で見られた。同じ墓を使用する人間が数多くいるためにこのようなものが用意されている。また、墓自体にはほとんど鍵がかけられていたが、墓の敷地内にも簡単には入れないように柵に鍵がかけられているものもあった。



写真 22 共同墓のきまり



## 5. 旧暦文化のまち

### 5.1 旧暦と潮

糸満では旧暦を使い、月の満ち欠けで一年を数え、潮の満ち引きで漁に出る。そのため、8 : 6 計算というものがあり、これによって干潮の時間を割り出し、さらに風向や潮の流れを考えて漁に出ていた。今のように天気予報がない時代には自分の勘が頼りであり、8 : 6 計算はそれを支えるものだった。

計算方法は、旧暦の日にちに8をかけ、出た数字の十の位は干潮が何時なのかを表し、出た数字の一の位に6をかけた数字が干潮の“分”を表すというものだ。

この計算を具体的に説明するために、旧暦の12月14日を例にして考える。まず、 $14 \times 8$ で118という数字が出るのでこの十の位、つまり1が時間を表すこととなる。そして一の位は8なので、 $8 \times 6$ で48という数字になり、この日の干潮は1時48分頃だと考える、という計算である。

### 5.2 旧暦と生活

海人は旧正月に合わせて港にもどり、大漁旗を漁船に飾り付けて祝う。また、糸満ハーレーと糸満大綱引きはどちらも旧暦で行われる。このように旧暦と糸満の人々の生活は、密接なつながりがある。

例えば、ハーレーは旧暦の5月4日に行われるが、この日の干潮の時刻を8 : 6 計算で出すと、3時12分となる。 $(4 \times 8 = 32、2 \times 6 = 12)$  満潮の時刻は干潮の約6時間後と考えられるので、9時12分である。そのため、ハーレーの日は満潮になる前に、つまり9時までに必ず御願をすませるそうだ。

また、旧正月には飾りを7日に片付けるが、8 : 6 計算を使うと、この日の干潮は5時36分、つまり満潮は11時36分だと考えられる。この日はこの満潮の時刻までに必ず飾りを片付けなければいけないとされている。

旧正月は、旧一日は自分の親が住む本家に集まり、旧二日には門中が同じ子孫が集まり、旧三日には漁民の団体ごとに集まり船にエンジンをかけるそうだ。



写真 23 旧正月の糸満漁港（糸満市ホームページより）



## 6. これからの糸満

### 6.1 まちぐわー（市場）

写真 24 はあんまー魚市場という市場で中央公設市場の一部となっている。市場のことを沖縄では「まちぐわー」という。このまちぐわーでは、4、5年前からどんどん客が来なくなり、今では市場が賑わいそうな朝でも客が少ないようだ。

客が来なくなったきっかけとして、まず近くにあった市役所が移転したことが 50%、そして大型スーパー（写真 25）ができたことが残りの 50%だと話していた。写真 26 は市役所が移転する以前の地図で、星印の位置が市場である。



写真 24 あんまー魚市場



写真 25 サンエー（大型スーパー）



写真 26 市役所が移転する以前の地図

実際に私がこの市場の前で話をした方は、自分の住む島から糸満に買い出しにたまに来るようだが、「サンエー（大型スーパー）に行ったら何でもそろっているから、ここよりそっちに行きな。」と何度も私に勧めた。

このように客足が遠のいている糸満のまちぐわーだが、旧盆や旧正月になると普段はスーパーで買い物をする人も、この日だけはまちぐわーで買い物をすることが多く、たくさんの方がやって来て賑わうそうだ。

また、那覇を拠点とする観光客が糸満市に来るとしても、糸満より南部のほうの平和祈念堂などへの直行の移動となり、まちぐわーに寄りたいたいと思う人がいても寄ることができ

ず残念だという話も聞いた。

## 6.2 これからの漁業

漁業については、現在漁師である4名の方、漁師を引退した方1名と市役所の海人課<sup>2)</sup>の方に話を伺った。共通していたと思うのは、後継者の不足、資源保護の二つが問題点であるということだ。

漁師を引退した上原佑強さんによると、自分が漁に出ていた当時は、漁師という職に将来性がなく、子どもにはつらい思いをさせたくなかったため、後継者を育てなかったことが現在の問題となっているようだ。

上原さんは、漁に行きたがる自分の子どもをわざと嵐の時に舟にのせ、怖い思いを体験させることで漁師の道を選ばせないようにしたという。

また、資源保護に関しては、海の環境はどんどん悪化してきて、魚が獲れなくなっているようだ。漁業の発達している糸満でも、他と比べて養殖の技術が遅れているため、環境の悪化は深刻な問題であるようだ。

漁師の方によると、これからは観光漁業を取り入れ、魚を獲るだけでなく、海や漁業の文化を見せる取り組みを増やしていかなければいけないようだ。実際に漁業組合の青年部が他の漁村に研修に出かけ、参考となることを学んでいる。

現在漁師として魚を獲っている人が、近いうちに観光客をターゲットに仕事をして生活していくこととなる。本当は漁師として魚を獲ることで生活していきたいが、ためらっていると他から業者がやって来て、仕事を奪われてしまうために急いで進めているのだそうだ。

新しく埋め立てられた土地のほうへ行ってみると、ホテルの建設予定地があり、その周辺にはビーチが造られていた。また、新しい道路が建設中であり、これが完成すると糸満までの交通が便利になる(写真28)。

このように糸満は、これからは観光地としても変化していき、人が集まることを目的に開発され、新しい一面を見せることになると思われる。

## 6.3 変わらない糸満

これから、観光化という形で変化していくと思われる糸満だが、この先、観光客を対象



写真 27 漁業組合



写真 28 建設中の道路

に観光漁業が進められることや、リゾートが開発されていく中で、今まで長い間続いてきた“旧暦文化”は変わってしまわないのだろうか。那覇と同様に、糸満ハーレーも大綱引きも観光客が訪れやすいように、休日に移されていくのではないだろうかと思った。

しかし、糸満の人々にこのことについて尋ねると、全員が旧暦はこのまま変わらず守り続けられていこう、と話した。ハーレーや大綱引きなどの行事は、糸満の海人が自分たちの生活のために行うのであり、旧暦でなかったらただの祭になってしまって意味がなくなるそうだ。話を聞いて、糸満では旧暦の文化がなくならずに、これからも受け継がれていくのだと感じた。

## 7. まとめ

今回糸満で三日間にわたる調査をして、たくさんの人に話を伺うことができた。ただ、糸満の方言が全く分からず、せっかくのお話も100%聞き取ることができなかったのが残念な点であった。

また、調査に協力してくださった方々に心からお礼を申し上げたい。

## 注

1) 白銀堂にまつわる伝説として語り継がれている話とは、以下のようなものである。

昔、糸満村に住んでいた男が薩摩の武士から金を借りた。しかし、期限までに返すことが出来ずに岩の下に隠れているところを見つかり、刀で切られようとした。その時に「私はあなたを騙すつもりはなく、返したくても金が無く、恥ずかしくて止むを得ずここに隠れていたのです。どうか命をお助け下さい。古人の教えに『意地ぬ出ら一手引き、手ぬ出ら一意地引き』という言葉があります。次は必ずお返しします。」と詫言した。これを聞いた武士は、刀をひき、薩摩に帰った。

武士が家に着いた時は真夜中となっていたが、静かに戸を開けて入ると自分の妻が見知らぬ男と寝ていた。カッとなって一刀両断に斬りつけようとしたが、糸満の男の言葉を思い出した。よくよく顔を見ると、見知らぬ男だと思ったのは男装をした自分の母だった。母は、息子が旅に出ている間にもしも悪い男が忍び込んで来たら、取り返しがつかぬと考え、男装をして嫁と寝ていたのだ。糸満の男の言葉を聞いていたお陰で、彼は母親と妻を殺さずに済んだので、深く感謝した。

薩摩の武士が再び糸満の男のもとへやって来て、礼を言った。糸満の男は返済の金を用意してあったので、期限を守らなかった上に命を助けてもらった礼を述べ、その金をさし出した。武士は「母と妻の命は金に代えることは出来ない。せめてこの金は受け取ってもらいたい。」と、どうしても金を受け取ろうとしない。二人は互いに金を譲り合い相談の上、糸満の男が隠れていた岩の下にその金を埋めた。

後世の人がこの話を聞き、その岩を白銀岩と名付け、神のいる聖地として礼拝するようになった。というのが白銀堂の由来だと言われている。(沖縄県糸満市白銀堂運営委員会作成資料より要約)

2) 糸満市役所には「海人課」があり、漁業に関する仕事をしている。

## 参考文献

木崎甲子郎・目崎茂和編著(1984)『琉球の風水土』築地書館

## 参考ウェブサイト

写真12 糸満ハーレーのホームページ [http://www.city.itoman.okinawa.jp/site\\_hare/framepage2.htm](http://www.city.itoman.okinawa.jp/site_hare/framepage2.htm)

写真23 糸満市ホームページ <http://www.city.itoman.okinawa.jp>

Wikipedia「糸満」 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B3%B8%E6%BA%80>